

【シンポジウム】

マーク・トウェインをめぐる「二次創作的」想像力

司会・講師：中垣 恒太郎（専修大学）

講師：細野 香里（慶應義塾大学非常勤講師）

講師：里内 克巳（大阪大学）

講師：柴田 元幸（東京大学名誉教授）

マーク・トウェインは作家としての出発地点から文学ジャンルに対し自覚的な姿勢を示しながら独自の作品世界を切り拓いた。先行する旅行記に対しパロディの視点を打ち出すことで話題となった出世作、*The Innocents Abroad* (1869)、「バーレスク風自叙伝」と銘打った、*Mark Twain's (Burlesque) Autobiography* (1871)、少年を主人公とする冒険物語にパロディの要素を織り交ぜた、*The Adventures of Tom Sawyer* (1876)、アーサー王物語の「翻案」であり SF 物語の先駆的作品ともなった、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889)、探偵小説ものの流行をとりいれた、*Tom Sawyer, Detective* (1896)、疑似歴史ロマンスとしての *Personal Recollection of Joan of Arc* (1896) など、その足跡から同時代の文学ジャンルのあり方、トウェインのジャンル解釈などを探ることができる。トウェインが同時代のアメリカ大衆文化をどのように咀嚼し独自のスタイルを創り上げていったのか、さらに、「国民作家マーク・トウェイン」のイメージが 20 世紀以降、どのように「アメリカ的」物語、アメリカ大衆文化の原風景として翻案・継承されていったのであろうか。

本シンポジウムでは、大衆文化の継承・発展過程を広義の「二次創作的想像力」として捉え、アメリカ大衆文化におけるトウェインの貢献について再検討する。まず司会が導入として「トウェインをめぐる大衆文化受容」を概観し、各論として、「アンテベラム期の大衆文化受容」、「トウェイン自身によるジャンル（二次創作的）作品」、「『ハックの末裔たち』の系譜」の観点からそれぞれの報告を展開する。その後、参加者を交えた質疑に繋げていく。ジャンル文学論、創作論、モチーフ、パロディ観、大衆文化論、近代とナショナリズムなどをめぐるさまざまな論点が浮かび上がってくることになるだろう。

トウェインをめぐるマルチメディア時代の大衆文化受容

中垣 恒太郎（専修大学）

クレイアアニメーション映画、*The Adventures of Mark Twain* (1985) および、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889) の映像翻案作品をもとに 20 世紀末から現在にかけてのトウェインをめぐる大衆文化受容の動向について展望する。クレイアアニメーション映画版はトウェインがトム、ハック、ベッキーに自身の作品世界を案内する構成になっており、作家像が文化的アイコンと化している格好の例を示している。*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* はもともとアーサー王伝説をめぐる「二次創作」として成立した背景があり、トウェインによる作品の中でももっとも自由度が高い形で多彩な翻案が現れている作品でもある。現在のトウェインをめぐる大衆文化受容について概観し、本シンポジウムの導入としたい。

ジャンルを巡る攻防——『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるセンセーション・ノヴェルと奴隷体験記の影響

細野 香里（慶應義塾大学非常勤講師）

デイヴィッド・レナルズの『アメリカン・ルネサンスの地層』（1988）は、アメリカン・ルネサンス期の文学動向が大衆文化の喚起する想像力と切っても切り離せない関係にあったことを詳らかにした。アメリカン・ルネサンスの作家たちとは世代を異にするものの、トウェインもまた例えば P.T.バーナムによる見世物や骨相学などの疑似科学をはじめとしたアンテベラム期の文化に大きな影響を受けていたことは数々の先行研究によって既に指摘されている通りである。本発表では、こうした大衆文化と関わりの深い文学形態であるセンセーション・ノヴェルと奴隷体験記の形式をいかにトウェインが換骨奪胎し作品に取り入れていたかを『ハックルベリー・フィンの冒険』を中心に再検討する。センセーション・ノヴェルと奴隷体験記の関係性を踏まえながら、トウェインの創作時の参照元を注釈的に述べるにとどまらず、両ジャンルの様式の導入の効果に注目することで作品解釈の地平がいかに拡大しうるかを考えたい。

〈書き直し〉のマーク・トウェイン——Simon Wheeler 連作を中心に考える——

里内 克巳（大阪大学）

本報告では、トウェインの生前には刊行されなかった、探偵サイモン・ホイラーを主人公とする連作を素材として、ある作品が別の作品へと変貌していく、書き直しのダイナミズムを探ってみたい。迷探偵が些細な手掛かりを基に頓珍漢な憶測をめぐらせ、事態を更に紛糾させていくという趣向の戯曲“Simon Wheeler, The Amateur Detective”をトウェインは 1877 年に書き上げ、上演を目指すと同時に、小説化にも着手した。だが上演は頓挫し、“Simon Wheeler, Detective”と題された小説も未完に終わった。この連作が再発見された 1960 年代での研究を振り返ると、当時のトウェインが書きあぐねていた *Huckleberry Finn* に通じる要素を見出す批評が主流を占めている。だが、未発表原稿も含めた作品研究が進展した現在、この連作は直近の *Huck Finn* だけでなく、もっと後年の *Pudd'nhead Wilson* や *Which Was It?* のためのリハーサルとして定位できるのではないか。当協会による 2002 年のシンポジウム「トウェインと探偵小説」の成果も参照しつつ、この点について論じてみたい。

『「ハックルベリー・フィンの冒けん」をめぐる冒けん』を越えて

柴田 元幸（東京大学名誉教授）

『ジム・スマイリーと跳び蛙 マーク・トウェイン傑作選』（新潮文庫、2014）、『ポケットマスターピース マーク・トウェイン』（集英社文庫、2016）、『ハックルベリー・フィンの冒けん』（研究社、2017）の新訳および『ハック・フィン』受容をめぐる編著『「ハックルベリー・フィンの冒けん」をめぐる冒けん』（研究社、2019）などを刊行してこられた柴田元幸氏に 20 世紀以降の『ハック・フィン』受容について展望いただきます。

編著では「ハックの末裔たち」として、サリンジャー、ソール・ベローからノーマン・ロック、ロバート・クーヴァー、カート・ヴォネガットの作品が挙げられています。「ハックの末裔」に位置づけられる作品は字義通り「二次創作」に相当する内容から、精神性

をエッセンスとして継承するものまでさまざまに存在しますが、その系譜からどのような傾向を探ることができるでしょうか。その中でも特に、冒険から40年後のジムによる回想をめぐる物語、ジョン・キーン「リヴァーズ」(2015)を検討いただきます。(文責 中垣)

*なお、編著『「ハックルベリー・フィンの冒けん」をめぐる冒けん』を踏まえた柴田先生に対するご質問を事前にお寄せいただけましたら構成の参考にさせていただきます。コーディネーターの中垣 (knakagaki@senshu-u.jp) 宛に「〔(件名) トウェイン協会シンポジウム事前質問〕としてお送りください(10月20日頃まで)。当日のシンポジウムの中での質問もちろん受け付けますが、限られた時間を有効に活用できますように事前のご質問を歓迎します。